

大学の町を訪ねて

— ドイツ旅行より —

雲 井 昭 善

「世界は一つの村である (Die ganze Welt ist ein Dorf)」とは、何でも古くから言いならわされているドイツの諺であるらしい。わたしは、この夏、ドイツのあちこちの大学を訪問する機会をもつたが、その折、しばしば知人から聞かされたのも右の言葉であつた。何分にも夏休み中のこととて、各大学の研究室も大部分閑つており、従つて、会いたいプロフェッサーたちにも直接、会えなかつた。がその一面、思いがけない人々に会い、又、思わざるところでは日本文化の理解者たちに出つたことは、何といつてもわたしの大きな喜びであり、「世界は一つの村」という実感を味わつたことでもあつた。今回は、ドイツの、特に大学の町 (Universitätsstadt) としてわれわれにも親しまれている三つの町、マールブルグ、ハイデルベルグ、そしてチュービンゲンにおけるわたしのささやかな感想をお伝えしたい。

一

41 (雲井)

ウィーンを八月の中旬に発つて、サルツブルグ、ミュンヘン、シュツットガルト、フランクフルトを経て一路マールブルグに向つた。ドイツのアウトバーン (自動車道路) は、全くすばらしいの一語につきる。八月初めスイスに旅行してその美しいアウトバーンに感歎したわたしも、ドイツの、全土を縦横にくまなく走つているアウトバーンを見て、思わず、「ブンダーシェーン」と同乗の友人H氏に語つたものである。真中に緑の木々の連なる中部舗道をはさみ、その両側に、美しく舗装されたアウトバーンがはてしなくつづいている。二台の車が並んで悠々と走れ、双方の交通マネーも亦、まことに申し分ない。白雪の山々と碧玉の湖水の見えるスイスとは趣きも異なり、どこまでもなだらかな平野がつづく。そして申し合せたように、赤茶色の屋根の見える家々が、なだらかな丘の中腹、麓にかけて静かに息づいていて、そこには必ず、一きわ尖頭の高く天空につきささつている教会が見える。小さい村といくつかの町を走りぬけて、大学の町マールブルグに着いたのは八月十九日の午後も夕暮れに近かつた。

マールブルグ (Marburg/Lahn) は、他の大学の町ハイデル

ベルグやチュービンゲンと同じように、古城と河と大学、そして四囲の山々という全く似通つた要素をもつた町である。石だたみの、それも急勾配の坂道の多いこの町は、ラーン(Tahn)の流れをはさんで細長く横に拡がっている。ここに留学中の清沢哲夫氏(谷大・昭十九年卒)とは、氏の「帰国直前でひどく多忙」とのことと異国で語りあう機会を失したのは、かえすがえすも心残りのことであり、又、「健康を害した」との文面も、未だ心にかかつている。

この大学の有名な仏教学者ノーベル(Prof. Nobel)博士は既に二年前に他界し、いまはラウ(Prof. W. Rau)教授がその後継者として活躍している。かつて、学会誌『印度学仏教学研究』(第七卷第一号)に掲載された佐々木現順教授の報告(「ドイツ印度学界の現状」)にも見られるように、ノーベル博士の業績(金光明経の梵語テキスト校訂・独訳・索引等)は、この大学の印度学の誇るべき業績として輝やいている。博士の弟子のノイマン(Frl. Dr. Neumann)さんの親切な計らいで、わたしは、ラウ教授をラーン河の向う側に在る私宅に訪問したが外出中で会えず、又、シュロッスの近くに住む宗教学のハイラー(Prof. Heiler)教授も、既に出発後でここにはいられなかつた。(今秋、日本訪問の予定)しかし、この大学の図書館長ヘーニッシュ(Prof. W. Haensch)教授にゆくりなくも会えたことは、大きな収穫であつた。

H教授は三十年前に京大に留学し、当時、羽田亨博士のもとで東洋史を専攻された人である。京大の武内義範教授や、現在マールブルグで研究(宗教学・仏教学)中の京大の上田閑照氏

(不在だったが)の話題に接したのも懐しかった。午前中に図書館を訪問して、刺を通じ、午後再び教授を尋ねたところ、いきなり、「あなたは、大谷大学の先生で……」と、まことにあざやかすぎる日本語で挨拶されたのには、いささか面喰つた。そして一夜、「ゾンネ」という、何でもこの町の古い有名なレストランへ案内してくれて、京都の古き話しを語り、又、新しい京都の移りゆきを話しあうことができた。「このへんで日本語にスイッチをきりかえましょうか」などと、そんな冗談を話す教授は、ほんとに日本語が上手であり、京都をこよなく愛し、かつ日本文学に対する理解も極めて深い。レストラン「ゾンネ」から、エリザベートキルへの前に在るホテルに通ずる夜更けの坂道を、教授とゆつくりと散歩したが、「ドイツは北に行くにつれてウィーンよりは寒いから十分に気をつけて……」と言つてくれる教授に、わたしは日本的なたたかみを肌と感じたことであつた。

二

さて、大学の町ハイデルベルグ(Heidelberg)!! アルトハイデルベルグとして余りにも有名なこの町は、多くのゲルマニストにとつて垂涎おく能わざるところである。「ハイデルは少し俗化したようですが、それでもやはり、とてもすばらしいところですよ」と、ボン(Bonn)の駅頭でフト出合った日本の若き女性ゲルマニストがこう言つてくれたが、どうしてどうして、ネッカー(Neckar)のほとりに在るこの古都は、旅人の心をなぐさめて余りある町と言えよう。学生の頃、「京都は日

本のハイデルである」と、故鈴木弘教授がよく話していられたが、その実感は十分にすると、大学の町としての感じはまことに似通つた点もある。

ここでわたしは、以前から知りあつていた医者で仏教を研究しているクラール (Dr. Klar) 家に招かれ、初秋の二夜を、家族の人たちと心ゆくまで語りあう機会をもつた。彼は、過ぐる十年前、日本で催された世界仏教徒会議に際し、ドイツ仏教会を代表して参加した一人である。いま彼の書斎は、日本仏教関係の書物で充たされ、二人の大学生の子息にも、アーナンド、ラーフラという仏教名までつけている程の仏教人である。一夜、この大学近くのレストラン「既舎 (Herdenthal)」へ案内してくれたが、若きドイツ青年、学生たちが夜更けまでツイストとやらの踊りに興じていた。知人のドクター夫妻も興が湧いたとみえて、狭いステージにのぼつて静かにワルツを踊つていたが、その光景にはほほえましいものがあつた。

ハイデルは、何と言つても大学と古城の町である。今次の大戦で多くのドイツの都市も破壊され、いわゆる再建都市の多い中にあつて、ここハイデルは全く被害をうけなかつたことも、大きな幸せである。ケーニヒスツール (Königsstuhl) への登山電車の途中に、シュロッツへ通ずる駅があるが、そこには中世紀のルネサンス風の古城があつて、今日も多くの観光客で賑わつている。そして、幾星霜の間、風雪にたえてきたこの古城は、いまでもその優美な影をネッカーの清流におとしていたのである。その古城の廢墟に佇み、眼下に見えるネッカーの流れと、それに沿つて並んでいるこの学都のしつとりとしたたたず

まいにしばし眼をやるとき、*「アルトハイデルベルグの感ここに極まる」*の想いがしたのは、わたしひとりであろうか。

ネッカーの流れに架かつているアルテブリッケを渡ると、ちようど古城とは反対の側に、かの有名な *Philosophenweg* があつて、ネッカーの流れと平行してつづいていく。九月初めの雨あがりの朝、わたしはゆつくりとひとりてここを歩いてみた。人の通り過ぎる気配すらほとんどしない朝のこの通りには、ブドウ畑と菜園とが、なだらかなスロープをえがいている。向い側のケーニヒスツールにつづく紅葉に近い山々の眺めは、赤茶色の屋根の家なみと、二百段の螺旋階段のある聖霊教会 (*Heiliggeistkirche*) のあの高い高い尖塔、そして有名なリッターハウス、大学、しかもその背後にあるあの淡紅色のみやびやかな古城と相まつて、雨あがりのあとに一段の風情を添えていた。いま九月初旬のこの *Philosophenweg* には、故国の秋をおもわせる薄桃色のコスモスが咲きこぼれ、雨にぬれたその清楚な花弁を僅かにうなだれている。栗の実もすつかりふくらんで、いまにもはじけそうなのが二つ三つとらえられる。秋色とみに深い古都ハイデルのすばらしい朝のしづけさ。まこと「低徊去る能わず」の形容がピッタリとする一瞬である。

一おうのブランはたててあつても、気がむけば幾らでも予定を変更できるわたしの旅程ではあつたが、わたしをして六日間ハイデルに留まらしめたものは、何と言つてもハイデルのもつ学都としてのしづけさに他ならない。知人のドクターは、マンハイムでの勤務が終ると、わたしを連れてハイリゲンベルグ (*Heiligenberg*) に在る荒廢した殿堂へ、或いは近在のデイル

スベルグ (Disberg) の古城へと車を走らせる。ようやく暮色に つつまれかけたネッカーのほとりの家々に灯りが見え出すと、アルトハイデルの古城は、照明灯のもとにくつきりとその容姿を浮びあがらせる。その昔、日本の多くの留学生をここにひきとどめた所以も亦、宜なる哉である。

「ドイツ旅行で一ばん気に入つたところは？」と問われたら、ちゆうちよなく「ハイデル」と答えるであろうわたし。それ程、印象深い町であつた。

三

ハイデルベルグを午後二時半発の急行で発つて、シュツットガルトを経てチュービンゲンの町に着いたのは、九月七日の夕刻であつた。ドイツの汽車は本数も多く、座席も容易にとれるし、旅行者にとんど不便を感じさせない。北のハンブルグから東のベルリンへ。そこからハノーファーを経て西のデュッセル、ケルン、ボンとまわり、フランクフルト、ハイデルベルグと南下して、ドイツでも南のチュービンゲンまでくると、何となく四囲の風景もスイスを想わせる。小さな村々を次々と通り過ぎてゆくと、乗り降りする人たちのローカルな会話が妙に、一人旅のわたしの旅愁をかきたたせる。

チュービンゲンの町はネッカーの上流に位置するだけに、こまでくるとネッカーの流れも急に細く、せまくなつてくる。九月八日の朝、わたしは何の前ぶれもなく、グラージェナツプ (Prof. Glasenapp) 博士をその私宅に訪問した。もう五、六年も前のことにならうか、東本願寺で、折から来日中の博士を囲

んで、京都在住の諸教授との懇談会があつた。その折、縁あつて出席の機会をもつたわたしにとつて、あのものやわらかな、円満な博士の人柄が強く印象づけられていた。学都チュービンゲンを訪れたゆえんも、「博士に久々会えたら……」という一念に他ならなかつた。そしてこの願いが、奇しくも博士の七十一歳の誕生日にかなえられたのである。

閑静なチュービンゲンの郊外、ハウス・シュトラッセに住む博士は、「よう訪ねてくれた。今日はわしの誕生日だ」と、開口一番、こう言つてにこやかにわたしを迎えてくれた時、何とも言えない親しみを感じたわたしである。そして、博士の後継者ティエム (Prof. Thieme) 教授をはじめ、たくさんの弟子の人たちが集つて来て博士に祝詞を述べる。その多勢の弟子たちに囲まれた博士はまことに嬉しそう。一人一人の弟子たちの祝詞をうけてはワインを傾ける博士の両眼に、かすかに涙が光つていた。

思えば、わたしはその前日、ハイデルからバーデンバーデンへ向う予定であつた。それを何かのひようしでとり止め、一日くりあげてチュービンゲンへ来たわけであつたが、そのことが、偶然に、博士の七十一歳の誕生日にめぐりあわせる縁を与えてくれたのである。「どうも偶然のような気がしません。これを仏教では因縁と言うのでしょうか」と言うわたしを、「そうだと」と、慈愛のこもる眼ざしでみつめる博士であつた。そのつやつやした健康そうな顔は、とても七十一歳を思わせない。日本のいろいろの知人、教授の安否を心せわしく問われる博士に、「是非もう一度、日本へ来て下さい」と言つて、わた

しは博士宅を辞した。ティーメ教授をはじめ、この大学のインド学・仏教学研究に携わっている若き人々に会えたことは、わたくしにとつて望外の欣びであつた。因みに、博士七十一歳の生誕を記念して、"Von Buddha zur Gandhi"なる博士の論集が出版されている。

X X X

二十五日間に亘るわたしのドイツ旅行も、あいにくの夏休み中だつたことで、前述のように会いたい教授にも会えないことが多かつた。かつて、佐々木現順教授のいられたハンブルグ大学、及びそのゼミナールをはじめ、ベルリン自由大学(西ベルリン)フルボルト大学(東ベルリン)のこと。或いはケルンの大ドームや、ハッカー(Prof. Haeker)教授のポンのインド学研究室、そしてコブレントツマインツ間のライン河舟行。フランクフルトのゲーテハウスやポンのベートルヴェンハウス。サルツブルグのモツアルトハウス等々。そして何にもまして、世界の焦点である東ベルリンでの印象など、書きたい素材が多い。しかし、すでに与えられた紙幅を超過しそうなので、それらのことは又、別の機会にゆずることにしよう。(一九六二・九・二九・在ウィーン)

大谷学報 第四十一卷 第三号

華嚴法藏の善知識観……………山田亮賢

戦国大名と本願寺……………北西弘

— 武家門徒の問題をめぐつて —

飛鳥仏教新考……………堅田修

「屠沽ノ下類」考……………細川行信